



Title	泣く昔男：『伊勢物語』の物語構成
Author(s)	木下, 美佳
Citation	詞林. 2004, 36, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67523
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

泣く昔男

『伊勢物語』の物語構成――

はじめに

『伊勢物語』には『古今集』と同一の歌が見られる章段が幾つかある。しかし、同じ歌であっても、『伊勢物語』と『古今集』とはその解釈に違いが生じている。その理由の一端は、山本登朗氏が「和歌の解釈とは本来、一首の歌が詠まれた事情を十分に考慮に入れながら、その周囲の状況の中で一首が持っていたはずの本来の意味を復原してゆく作業を意味するはずだが、伊勢物語の作者はしばしば、一首の歌の意味を本来の成立事情から意図的に切り離すことによって、本来の意味とはかならずしも同一ではない、もうひとつの意味内容をその歌の表現の中に見出し、逆にそれにあわせて、新しい架空の詠作事情を創作しようとする。」と述べられたように、『伊勢物語』の作者たちが和歌解釈の問題にきわめて自覚的であったことに由来するであろう。

「新しい架空の詠作事情」の幾つかは山本氏の論考により考察がなされている。稿者はそれに加えて、その詠作事情が

ある統一的な構造をもって創出されている点が重要であると考える。統一的な物語構成を探る作業は、『伊勢物語』の物語としての在り方を考えるのに有効であろう。本稿では、以上のような視点から「泣く」という語を手がかりとして、『伊勢物語』の創作意図を考察していくこととする。

一 泣いて帰る姿――八十三段から――

八十三段は、惟喬親王が登場する章段の一つである。

水無瀬の狩から数日経てから宮に帰ってきた「馬頭なりける翁（昔男）」は、親王を送った後で早々に帰ろうと思っていた。しかし、なかなか帰そうとしない親王の様子を不審に思い、「枕とて草ひき結ぶこともせじ秋の夜とだに頼まれなくに」という歌を詠み、親王と共に夜を明かしたのであった。前半部でこのような内容が語られたあと、後半部は次のように続く。

かくしつつまうで仕うまつりけるを、①思ひのほかに、御髪おろし給うてけり。正月に拝みたてまつらむとて、

木下 美佳

小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪いと
たかし。しひて御室にまうでて拝みたてまつるに、Aつ
れづれと、いともがなしくておはしましければ、やや
久しくさぶらひて、いにしへのことなど思ひ出で聞えけ
り。②さてもさぶらひてしがなと思へど、公事どもあり
ければ、えさぶらはで、B夕暮にかへるとで、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を
見むとは

とてなむ泣く泣く来にける。

激しく泣く昔男の姿は二重傍線部で示したように末尾に見
られる。ここで詠まれる歌は『古今集』では次のようにある。

惟喬のみこのもとにまかりかよひけるを、かしらお
ろしてをのといふ所に侍りけるに正月にとぶらはむ
とてまかりたりけるに、ひえの山のふもとなりけれ
ば雪いとふかかりけり、しひてかのむろにまかりい
たりてをがみけるにAつれづれとしていと物がなし
くてBかへりまうでてよみておくりける

なりひらの朝臣

わすれては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見
むとは

(巻十八・雑下・九七〇)

双方ともに惟喬親王の出家と、それに接した昔男・業平の
悲しみを伝える点ではほぼ同じ展開を辿るが、傍線部Aの
「つれづれ」といものがなし」い主体と、傍線部Bに示され

る歌を詠む場面に違いが見られる。『古今集』のAで「もの
がなし」い様子でいるのは、和歌の詞書ということ踏まえ
れば詠者である業平となるが、『伊勢物語』では惟喬親王で
ある。また、傍線部Bの違いは、片桐洋一氏が「なお、『伊
勢物語』ではそのような状況に堪え切れなくなった業平が帰
るにあたって詠んだ歌とされていて、場面的な盛り上がり
があるが、『古今集』では帰ってから詠んで送った歌となっ
ているのに注意しておきたい。」と述べられたように、歌を詠
む場面の設定自体の違いであり、物語展開にも少なからぬ差
違を与えている。言うまでもないが、『伊勢物語』は「歌物
語」である。中心である和歌へ向けて物語が展開するのは当
然であり、また、「物語」であるからこそ『古今集』にはな
い①や②のような、心情を吐露する語を交えながら語られて
いることも納得できよう。

八十三段は、惟喬親王と過ごした時を回想し、その懐旧の
思いを歌に詠み、そして泣いて帰る構成をとっている。破線
部①に関して、竹岡正夫氏が「(前略)二人の人間的つなが
りがここで急に断ち切られたのである。私たちはそういう時
の馬の頭の衝撃と切ない心情とをここで十分味わえばよいの
である。」と説かれたように、前半部と後半部の対比、破線
部①に示された男の心情だけで、「物語」として出家の際の
悲しみを十分に伝えられたはずである。だとすれば、なぜ、
『伊勢物語』では歌に付随して、最後に二重傍線に示される

泣く姿が描かれねばならないのか。この場面は『古今集』には全く描かれていない。このことを考えるために、以下、同趣旨の内容を持つ章段を順次考察していくこととする。

二 泣いて帰る姿―四段から―

八十三段同様に過ぎ去った世界を懐古し、その懐旧に根ざした歌を詠み、さらに泣きながら帰る姿で閉じられた章段として、四段が挙げられる。

むかし、ひむがしの五條に、太后の宮おはしましける、
西の対に住む人ありけり。それを、本意にはあらでこころざし深かりける人、ゆきとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、①なほ憂しと思ひつつなむありける。又の年の正月に、梅の花ざかりに、去年を恋ひていきて、②立ちて見、居て見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に、月のかたぶくまでふせりて、③去年を思ひいでてよめる。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣くかへりにけり。

ここで詠まれた歌は『古今集』では次のようにある。

五条のきさいの宮のにしのたいにすみける人にほいにはあらでものいひわたりけるを、む月のとをかあまりになむほかへかくれにける、あり所はききれどえ物もいはで、又のとしのはるむめの花さかりに月のおもしろかりける夜、こぞをこひてかのにしのたいにいきて月のかたぶくまであばらなるいたじきにふせりてよめる

在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして
(巻十五・恋五・七四七)

双方ともに、女と逢っていた去年の戻らないことを悲しむ男の姿が語られる点では共通する。しかし、四段は昔男の悲しみを描く物語となっており、傍線部①に示されるように男の心情吐露が交えられ、また、そのような心情を伝える描写が多いことに気付く。そして、過去を回想する歌を詠み、泣く姿で閉じる語り方は、八十三段において、親王と過ごした過去を懐古し、その過去はもう戻らないと悲しみながら帰る昔男の姿を描く語りと同種のものである。この同種の悲しみを描く四段において、段末の「泣く泣く」の前に、男はすでに一度泣いていることを見逃してはならないだろう。単純に、戻らない過去を悲しむ姿であれば、「去年に似るべくもあらず(②)」と去年と今との違いを目の当たりにした時の「うち泣く」姿で示されていると言えよう。それにも関わらず、さらに「去年を思ひいで(③)」させ、歌を詠み「泣く

泣く」帰る姿が描かれているのである。ここには泣く姿で章段を閉じようとする、『伊勢物語』の意図が感じられる。

過去を懐古する歌、その歌の後に「泣く泣く」帰る男の姿を描く八十三段、四段の語り方は、ともに相通ずる語りくちであると言えよう。このような、泣く姿によって章段を閉じる物語のスタイルは、『伊勢物語』の作られ方と言えるのではなからうか。

三 泣きながら歌を詠む―六十九段・八十四段から―

先に挙げた八十三段、四段は、過去を回想し、懐旧の思いを歌に詠み、その後に泣く姿で章段が閉じられる物語構成となっていた。歌の後に「泣く」という語が置かれているのは、この二章段のみである。泣きながらではあるが、懐旧に根ざした歌を詠む章段として、他に、六段、六十九段、八十四段を挙げることができる。「泣く」という語の位置に違いが見られるものの、この三章段は泣きながら詠む歌で場面が閉じられており、八十三段、四段と同様の物語構成であると考えられよう。以下、考察していくこととする。

まず、『古今集』を通じて考察することができる、六十九段、八十四段から見えていくこととする。

……女の閨近くありければ、女、人をしづめて、子一つばかりに、男のもとに來たりけり。男はた、寝られざりければ、外のかたを見出して臥せるに、月のおぼろなる

に、小さき童を先に立てて人たてり。男、いとうれしくて、我が寝る所に率ていりて、子一つより丑三つまであるに、まだ何ごとも語らはぬに、かへりけり。男、いとかなくして、寝ずなりにけり。つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もとなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより、言葉はなくて、

君や來し我や行きけむおもほえず夢かうつつか寝て
かさめてか

男、いといたう泣きてよめる。

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとはこよひ
定めよ

とよみてやりて、狩に出でぬ。

ここに見られる贈答歌は、『古今集』では次のようにある。
業平朝臣の伊勢のくににまかりたりける時、齋宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける
よみ人しらず

きみやこし我や行きけむおもほえず夢かうつつかねてか
さめてか

返し
なりひらの朝臣

かきくらす心のやみに迷ひにき夢うつつとは世人さだめ
よ
(巻十三・恋三・六四五・六四八)

六十九段は「狩の使」として『伊勢物語』の中核をなす章段である。『伊勢物語』では、傍線部で示したように、「いとかなしくて」「いぶかしけれど」「いと心もとなくて」と、『古今集』にはない男の心情吐露が立て続けに交えられている。このような男の心情描写があることにより、斎宮との一時が男にとって不確かなものへと変わったことは、片桐洋一氏が「翌朝になって、官人としての現実にいやおうなく戻らねばならぬ自分に気づけば気づくだけ、その逢瀬の現実性はみずからの心中においてさえ希薄になってゆくのである。」と指摘された通りである。そのような心情でいる男のもとに、女から歌が届けられた。女の「君やこし」の歌は、女自身も昨夜の事に対して曖昧であることが詠まれており、男の心細さに追い打ちをかける内容であった。昨晚の出来事を確認する手段を失った男は、絶望感を味わい、激しく泣いていると解釈できるのではなからうか。泣く理由はともかくとし、ここで確認したいのは、『伊勢物語』が「伊勢の斎宮との逢瀬」という出来事よりも、女との贈答歌、それに伴う昔男の泣く姿へと場面を収束させようとしていることである。二重傍線部で示される泣く姿は『古今集』には見られない。出来事の詳細を語るのではなく、泣く場面へと収斂しようとする『伊勢物語』の意図が六十九段においても確認できよう。

さらに、八十四段でもそのことは確認できる。
むかし、男ありけり。身はいやしなながら、母なむ宮な

りける。その母、長岡といふところに住み給ひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうです。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるに、十二月ばかりに、とみのこととて、御ふみあり。おどろきて見れば、歌あり。

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見ま
くほしき君かな

かの子、いたううち泣きてよめる。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといひる人
の子のため

『古今集』では次のようにある。

業平朝臣のははのみこ長岡にすみ侍りける時に、なりひら宮づかへすとて時時もえまかりとぶらはず侍りければ、しはすばかりにははのみこのもとよりとみの事とてふみをもてまうできたり、あけて見ればことばはなくてありけるうた (よみ人しらず)
老いぬればさらぬ別もありといへばいよいよ見まくほしき君かな

返し なりひらの朝臣

世中にさらぬ別もなくもがな千世もとなげく人のこのた
め (巻十七・雑上・九〇〇・九〇二)

八十四段においても、「まうづとしけれど」「ひとつ子にさへありければ」という、簡単ではあるが、状況説明を交える

ことによって、哀れみを深めた物語世界が展開されることになる。ここで確認しておきたいのは、男が泣いたのは、死を予感させる母の歌を読んだ結果として描かれている点である。贈答歌において、相手の歌をきっかけとして泣く場面が描かれている展開は、描かれている出来事は異なるものの、六十九段と同様であると指摘できよう。八十四段においても、そのような詠歌に付随した昔男の泣く姿で章段を閉じようとする『伊勢物語』の作られ方が確認できる。

以上、『古今集』にはみられないが、『伊勢物語』には激しく泣く昔男の姿が描かれている章段を考察してきた。そもそも『古今集』の詞書全体を見渡しても、実は「泣く」という語は見られないのである。この点からも昔男の泣く姿が見られるのは『伊勢物語』の意図によるものと言えるのではないだろうか。

物語である『伊勢物語』は、歌集である『古今集』と異なり、男の悲しみを伝えようという意図があり、その為に、簡潔ではあるものの、男の心情吐露や状況説明を交えながら物語を進め、最後に激しく泣く男の姿へと収斂されていくのである。

四 歌を詠む前に泣く——六段から——

さらに『伊勢物語』の虚構の作り方が端的に示されている六段^⑨を見てみることにする。

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きにきけり。芥川といふ川を率ていきければ、草のうへに置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆくさきおほく、夜もふけにければ、鬼あるところとも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥におし入れて、男、弓、胡篋を負ひて、戸口にをり。はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。あなやといひけれど、神鳴るさわぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率てこし女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひしとき露とこたへて消えなましものを

これは、二條の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐる給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていたりけるを、御兄堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて内へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへし給うてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて後のただにおはしける時とや。

今西祐一郎氏が「六段の核心は「鬼はや一口に食ひてけ

り」といった伝奇性にあるのではなく、(中略)女を亡くした男の哀しみを描いている点にあるのではないか^①と指摘された通り、六段でも悲しむ昔男の話が書かれている。ここでの「足ずりをして泣く」行為も、悲しむ男の姿をより鮮明に照らし出していることを確認できよう。男の悲しみを描いている章段において、その悲しみをより際立たせるからこそ、また、激しく泣く姿によって場面を閉じるように構成されているからこそ、六段の核心が今西氏が指摘されたように読み取れるのである。

所謂後人注といわれる解説部分にも「泣く」という語は見られるが、泣いているのは連れ去られた女である。解説部分には男の泣く姿は見られない。物語部分では女の泣く姿は見られないにも関わらず、男の泣く姿は描かれている。先に見たように、『伊勢物語』の語り方は出来事よりも、男の悲しみを描く物語展開に重点を置いている。六段においても、解説部分で女が泣いたことを示しておきながらも、物語部分では男の泣く姿に収斂させる物語構成によって、男の悲しみを語りだそうとする方が事実よりも重要だったのである。ここにおいても、泣く姿で物語が収束する物語構成が確認できよう。

五 八十三段後半部の再検討

昔男の泣く姿で章段を閉じる物語構成により、『伊勢物語』

は昔男の大きな悲しみを語り出そうとする方法を使っていることを見てきた。このような理解を踏まえた上で、もう一度八十三段後半部を詳細に鑑賞してみたい。

かくしつつまうで仕うまつりけるを、①思ひのほかに、御髪おろし給うてけり。正月に拝みたてまつらむとて、小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪いとたかし。しひて御室にまうでて拝みたてまつるに、②つれづれと、いものがなしくておはしましければ、やや久しくさぶらひて、いにしへのことなど思ひ出で聞えければ、③さてもさぶらひてしがなと思へど、公事どもありければ、えさぶらはで、夕暮にかへるとて、

④忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは

とてなむ泣く泣く来にける。

惟喬親王の出家に際しての昔男の衝撃は一語で簡単に語られているが(①)、親王と昔男の二人の関係が一変する出来事であることを思えば、その衝撃が大きいものであったと伺い知ることが出来る。しかし、この衝撃を引きずるような語りはない。②の「ものがなし」い主体も親王であり、昔男の様子は描かれていない。昔男の心情は、②のような親王の様子を目にし、昔のことなどを思い出して語り合った時に、③「さぶらひてしがな」で吐露されるのであるが、それは「公事ども」があるので叶わないことであった。ここでは、常に

過去を回想する昔男が描かれている。

①で示された出家への衝撃と、それでも仕えたいという②の心情により、過去を強く回想する人物として再設定される。そして、出家前の親王との交流への懐古に根ざした「忘れては夢かとぞ思ふ」の歌も、強い懐旧の念の表れとなり、この一首において場面は最高潮の盛り上がりを見せる。その場面に付随して「泣く」という語が位置することによって、強く回想しても、その過去は戻らない悲しみが描き出されているのである。

つまり、八十三段では、親王の出家に際しての昔男の悲しみを描いてはいるが、その悲しみの対象を細かに語ったり、常に悲しみ続ける昔男を描いたりするのではなく、言葉は少なくとも、要所で昔男の心情吐露を交えることにより、さらに過去を強く回想する姿を描き出し、最後に泣く場面で閉じることによって、懐旧しても戻らない過去を悲しむ昔男の姿を描く形で展開していたのである。こうした物語構成の在り方は、『伊勢物語』の特徴であり、昔男の泣く姿で閉じる章段は、泣き方の表現、「泣く」という語の配置に統一が見られるものではなかったが、その位置付けは一樣であったことに気づかされるのである。

この八三段にあって、泣く場面とは、たしかに、親王の出家を悲しむ姿として全体を貫くものであった。しかし、それは「昔男の切なる心の表れ」と言われるようなものではなく、

むしろ、泣く姿へ物語を収斂させるという『伊勢物語』独自の物語構成であったのである。

おわりに

以上、『伊勢物語』に描かれた激しく泣く昔男の姿を辿り見ることに、その姿がどのような機能を果たしているのか、また、個々の章段の主題とどのように関わってくるのかを見定めつつ、「泣く姿」によって、この物語の新たな構造を提示してきた。

片桐氏が「『伊勢物語』の中核をなす章段が、過ぎ去った世界への回想・懐古を軸にしかかかっている」と指摘されたように、本稿で取り上げた章段は、いづれも『伊勢物語』の中核をなす章段であった。さまざまに過去を懐旧し、激しく悲しむ昔男の姿は、「泣く」という姿によって閉じられるという共通の物語構成を持っているのである。『伊勢物語』は、男の悲しみの対象を細かに語ることよりも激しく泣き悲しむ昔男に重点を置いており、泣く姿へと物語を収斂させていく方法によって、新しい架空の詠作事情を作り上げたと考えられよう。

注

(1) 山本登朗氏「和歌の解釈と物語―伊勢物語の方法―」(『伊勢物語論 文体・主題・享受』笠間書院・二〇〇一年)七〇頁。

(2) 前掲(1) 参照。

(3) 『伊勢物語』全百二十五段中、激しく泣く昔男の姿は、四段・六段・二十一・六十九段・八十三段・八十四段に見られるが、本稿では激しく泣く姿で閉じられている章段に限定し考察を加えることとしたい。

(4) 片桐洋一氏は、『古今集』での「いとものかなし」い主体を以下の理由により親王だと説かれている。

『伊勢物語』(定家本) 第三段では「つれづれといと物かなしくておはしましければ、」とあって、「つれづれといと物かなしくて帰りまうで来て」とあるだけで主語がないので解し難い。せっかく訪ねて来た業平が「つれづれとして」いるはずはないから、「つれづれとして」と物かなしくては、親王のこととするほかないが、言葉足らずというそしりはまぬがれない。

(片桐洋一著『古今和歌集全評釈』講談社・一九九八年) しかし、竹岡正夫氏は、「ものかなしくて」は「物悲しげにて」とでもあれば親王の様子になるが、このままでは業平の主観と解すべきである。(竹岡正夫著『古今和歌集全評釈』右文書院・一九七六年) と指摘されている。また、新全集『古今和歌集』の口語訳も「親王は所在ないご様子だったので、私はなんとなく大変悲しくて」とあり、「つれづれとして」の主体は親王であるとしているものの、「ものかなし」いのは業平であると解釈している。

(5) 前掲(4) 片桐洋一著『古今和歌集全評釈』参照。

(6) 竹岡正夫著『伊勢物語全評釈』右文書院・一九八七年

(7) 片桐洋一氏は「第八十二段や第八十三段前半では夜を徹して飲談したのに、今はどうしようもないのである。痛恨の極みとはこ

れをいうのであろう。こんなこと「思ひきや」、思いもしなかったよと泣くのである。泣きながら帰るのである。(中略) すべてのものが移ろいゆくを見る悲しみがこの一首において爆発しているのである。」と、泣く男の姿に触れられてはいるものの、泣く行為が付け加えられていることへの分析はなされていない。

(片桐洋一編『鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語』角川書店・一九七五年) 二〇六、二〇七頁。

(8) 前掲(7) 一六四頁。

(9) 片桐洋一氏は「大胆な推定、大胆な解釈だが、原初形態の『伊勢物語』は『古今集』と同様に、この贈答で終わって、後の「かち人の……」の連歌を中心とする場面はなかったと思う。」(前掲(7) 一六五頁) と、六九段が本稿に引用した贈答歌で終わることを推測されている。それならば、六十九段の「泣く」は場面の閉じ目ではなく、段末に置かれることとなり、物語が「泣く」に収斂していく語りをしていることが確認できる用例となる。

(10) 六段は、『伊勢物語』自身が、補注という形式で現実の出来事(実際はこの部分も虚構であるのだが)を挙げることにより、『伊勢物語』の物語部分の作られ方を端的に示していると考えられる。

(11) 今西祐一郎氏「伊勢物語・恋と死」『国文学』二四一・一九七九年一月

(12) 六段末尾の解説部分は、『伊勢物語童子問』の「後人の筆」や、『伊勢物語古意』の「本文と同筆ならぬ事は明らけし」により、後人の筆による注だと考えられていたが、この部分はいわば『伊勢物語』自身の種明かしであるという考え方が現在では有力である。

(13) 「忘れては」の解釈に、親王がこうになった成り行き・事情を忘れては、と解するものもあるが、八十三段後半部の解釈に政治的背景を重ねて読みとく結果であるので、本稿では単なる親王の現状を指すと解する。

(14) 『伊勢物語』と同じ「歌物語」である『大和物語』でも、激しく泣く姿は随所に描かれている。例として『伊勢物語』八十三段同様に、泣きながら帰る姿で閉じられている『大和物語』百一段末尾を挙げておく。

(近江守公忠が) 五条にぞ (季繩の) 少将の家あるにいきて見れば、いといみじうさわざののしりて、門さしつ。死ぬるなりけり。消息いひ入るれど、なにのかひなし。いみじう悲しくて、泣く泣くかへりにけり。

(百一段)

季繩少将との突然の死別に、公忠は「泣く泣く」と激しく泣いているが、これは波線部で示したように悲しみによる姿であり、『伊勢物語』のように和歌に付随した姿ではない。この点からも、懐旧に根ざした和歌と、それに付随する泣く姿へと収束する物語構成は『伊勢物語』独自のものであると言える。

(15) 前掲 (7) 二〇四頁。

(きのした・みか 本学大学院博士後期課程)